２３．５．１６　支部研究部に伝えたいこと

３．サッカー（ラグビー）の根底にある　育てたい人間像

「ピッチに立った全員が、
今何をすればよいかを考えることができる」

参考　アメフトは、監督　⇒　QB　⇒　全員の仕事
戦術決定は監督、状況に応じた戦術変更は QB のみ

① サッカーの文化学習でわかってきたこと
ラグビー校：フットボールルールの成文化
イートン校：フットボールルールの成文化
ランニングインやハッキングについての立場は異なっていたが、
ルールの成文化作業を生徒に委ねた点では　共通している

ジェントリーのわが子への願い
文武両道に優れた人間、判断力、主体性、決断力のある人間に
育って欲しい

この精神は、現在のサッカーのなかに今も生き続けている

FA,RFU の発足当初・・・・
監督やコーチはなく、選手が互いにパーフォーマンスを評価し合った
フェアープレー精神・・・・　勝つことより大切
もめ事は、キャプテンの合議で解決
レフェリーに委ねる必要もなかった

現在は、冠大会　⇒　勝利至上主義的になってきているが、
⇒　戦術も高度化しているなかで

概要：初期　固定的な　ポジション・任務
2 人制オフサイド以降、攻防の戦術の進化
システムの進化が進む
近年　個々の選手：オールラウンドプレヤー化
ボールの支配　ポデッションの重視
ゴールキックから　ボールを繋ぐサッカーへ

敵陣で　組織的に相手ボール奪う

ピッチに立つプレーヤーは、
ボールを保持すれば、いくつもの選択肢からどれを選ぶか！
味方がボール保持のとき　どの位置で保持しているか
自分はどこに居て、何のために　今どう動く
常に考え、動いている。
チーム戦術、システム、・・・・自分の動きを選択する。

学習初期から、自分で考え、動く　を大切する

個々の動き・・・・動きには理由がある。
チームとして、A には、〇〇の動きをして欲しかった！と、しても
A が、□□の動きを選択したのには理由があるはず、
特に、成長期の児童・生徒の選択肢は、本人の理由も大切
もちろん、本人の反省も必要だが、結果だけで評価しない

フットボール文化に　今も生き続けている　育てたい人間像
判断力、主体性、決断力のある人間

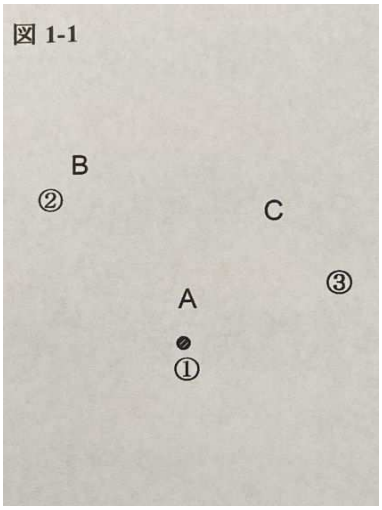
小学校の学習活動のあり方から変える

コンビネーション学習の早い時期に　下記のような設問を全員にします。

設問：あなたは、①です。ボールを保持しています

ゲーム中に考えるのは、初心者には難しい

紙上で考えてもらう

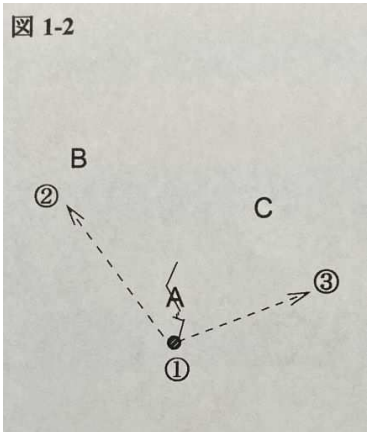


解説：

戦術を考えて、作図をする児童もいれば、自分に自信がなくて、③へのパスを選択する児童もいるでしょう。それも大切です。

一般的には、③は一番安全です。しかし、防御へのプレッシャーも少ないです。

②へのパスは、③よりは安全性に欠けますが、パスを受けた②には、2つの以上の攻めが考えられます。起動性が高いです。

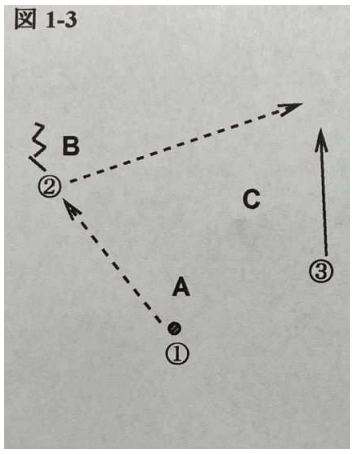


この設問に対して、コートが描かれていないから、作図できない！と言ってくる児童もいるでしょう！（居て欲しい）

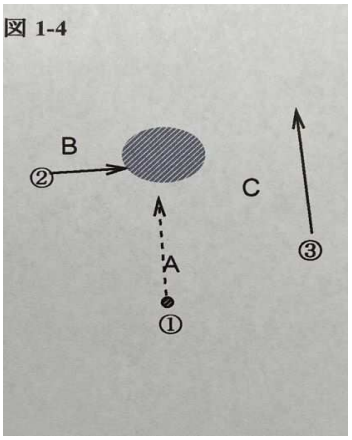
その子には、想うようにコートを描かせ、作図させます。

コートを描いていないのには、訳があります。

一般的には、自陣ゴール前では安全性が優先され、相手ゴール前では起動性が優先されます。



ボール操作に自身のある子は、図1-4のAを抜くパスやドリブル突破を選択するかも知れません。



大切なことは、児童のどの選択にも間違いはない！ということです。

正しい、正しくないより、どんな判断基準で、その戦術を選んだかをチーム、クラスが共有することが大切なのです。

※　攻防の切り替え学習後なら、4人・・バックパスからの攻めも選択肢